

◆◇◆ 情報開示 ◆◇◆

医療は最早聖域ではなくなつたと言われます。それどころか医療界は頻りに隠蔽体質を指摘される状況にあります。

しかし我々が患者や国民にとって真に必要な情報を開示するには、診療報酬制度の問題が立ちはだかります。

複雑な仕組みが一因となるレセプトやカルテの真正性への疑問、レセプト病名と国際病名の乖離、国民や時代の要請に応えられなくなった制度そのものの在り方。

現状のまま、情報の開示や公開に踏み切っても、余計に齟齬を来たすだけではないかとも言われます。

しかし積極的な情報の公開がなければ、制度改善のために我々が提言するにしても理解は得られそうにありません。

かつてテオドール・W・アドルノという哲学者が、全く別のことを説明するのに使った喩え(※)を援用します。

大きな石の下の窪みには孵化しそうな卵があります。それはひょつとすると怪物の卵かも知れません。また、そうでないのかも知れません。

怪物なんかではない、早くしないと死んでしまうと石を持ち上げるのか。

怪物の卵に違いないと決め付け、そのまま死なせてしまうのか。

それともどちらか見極めがつくまでと、生まれるか生まれないかは兎も角、暫し動かさずにおくのか。

情報開示の推進に関する各人のスタンスの違いはこういったものです。

また別の表現を用います。もう待ったなしとする開示促進派の人たちの考えはこうです。

我々が積極的に **Profess**(公言、明言)するか、それとも臆て **Confess**(懺悔)せざるをえなくなるかだ。

さて、積極的に情報を開示するならば、如何なる手段や方策があるのか。これから具体的なものを考えていきたいと思ひます。

※) かつては思想にとって、単に存在するにすぎないものの無意味さは絶えがたく感じられ、そこから思想の渴望が生じてきたが、その渴望は魔術からの解放を求める衝動へと世俗化されてしまった。魔術からの解放は、石の下で〔ひそかに〕怪物が孵化しつつあるのに、その石を取り除こうとする。つま

りこの解放にとっては、怪物の認識のうちだけに意味が保たれることになる。

【社会科学の論理／アドルノ、ポパー他（城塚登、浜井修訳）河出書房新社 1979年初版】

February20, 2008 / Zep wrote